

いつだって“甲南日和”！

校長 原之園 哲哉

事務室前の68期生が寄贈してくれたデジタル・サイネージ(電子看板・ディスプレイ)には、甲南のシンボルのドーム画像とともに「いつだって甲南日和」の文字が輝いている。

“甲南日和”(こうなんびより)に、来訪者は一瞬何を意味するのか思案するらしい。

実は、昨年4月当初小雨の降る中、部活動の試合に出発しようとしている顧問の先生に、「あいにくの天気ですね」と何気なく言ったら、(雨だから負けても仕方がないと)同情されたとしても受け取ったのか。顧問の先生は「甲南にあいにくの天気などはありません。いつでも実力です！」と断言した。その力強い言葉に心洗われる思いがした。

昨年、「薩摩半島縦走」は悪天候が懸念されたので、(悪天候でも)“甲南日和”の気持ちで臨もうと鼓舞した。実際は、悪天候を気にするような甲南生ではなかったが…

多く人は、事に臨んで失敗したときの保険として、まず出来ない理由(言い訳)を探すという。だが、このようなマイナス思考では実力は発揮できないのではなかろうか。

かのニュートン(注1)は落ちるリンゴを見て、万有引力の法則を発見したという逸話で知られている。彼は周知のごとく、ニュートン力学の確立、微積分法の発見等々で自然科学界の一種の英雄とも称されている。当時、彼の天才的な才能を高く評価する声に対して、彼はベルナール(注2)のことばを引用して次のように語ったという。

If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants.

(私がかなたを見渡せたのだとしたら、それはひとえに巨人の肩の上に乗っていたからです)

彼は「私は天才ではない。ただ、人間が長い時間をかけて築き上げてきた英知を学ぶことで高みに立てたから新たな発見ができた」と言いたかったのではないかと思う。

みなさんはまだ何者でもない。みなさんの未来は未知数だ。みなさんの未来は可能性に満ちている……と多くの先人たちは語る。それは疑いようもない真実だろう。ただ、その可能性を生かすかどうかは、みなさん自身の日々の心構えにかかっていると思う。

みなさんは、多くの英才たちが長い時間をかけて築き上げてきた、豊かな英知を思う存分堪能し、遙かかなたの未来まで見渡すことができる可能性を持っている。みなさんがその豊かな英知を享受し、自らの可能性を引き出すに必要なものは何か。それは特別なことではなく、その多くは甲南の日々の学校生活で得ることが出来るものだと思う。

学ぶことは生きることであり、学び続けることは、本来このうえない楽しみのはずだ。しかし、「巨人の肩」の上に登ることは容易でなく、学び続けるには相当の忍耐力と努力が必要だ。誰だって、気持ちの乗らない日もあるだろう。逃避したい日もあるだろう。

しかし、遙かかなた未来の見渡すためには、**いつだって“甲南日和”！**
という気持ちをまずは堅固に持ち続けることが必要だと思う。

巨人の肩の上に立とう！さあ、今日から始めよう！ **Let's begin!**

(注1) Sir Isaac Newton 1643~1727 イングランドの物理学者、数学者、自然哲学者。「天才的な自然科学者」とも。

(注2) Bernard de Chartres 12世紀フランスのネオプラトニズム哲学者。(我々は古代人の肩の上に立つ小人だ)